

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の 2年度目)

1. 研究課題

(和文) 啓蒙とフランス革命・I-1793年の研究

(英文) The Enlightenment and the French Revolution: I. A Study of the Year 1793.

2. 研究代表者

(氏名) 富永 茂樹

3. 研究期間

平成 22年 4月 から 平成 25年 3月 まで

4. 研究目的 (400字程度)

18世紀のヨーロッパで成長をつづけたいわゆる「啓蒙哲学」は、世紀の終わりにいたりひとつの大きな転機を迎える。すなわちフランス革命であり、ここには啓蒙思想が革命の思想へと転化すると同時に、革命の進展が啓蒙の観念を変形させてゆく過程を見て取ることができるであろう。本研究は桑原武夫教授がはじめた『ルソー研究』や『フランス革命の研究』以来の当研究所における蓄積を踏まえたうえで、あらためてフランス革命期、とりわけその絶頂期ともいえる1793 - 94年のモンターニュ派独裁期に目を向けることにより、ある観念を現実の政治=社会のコンテクストの中に位置づけるとともに、他方で政治的なるものを意識=文化とのかかわりをとおして理解することを目的としている。そうした目的に到達するために、まずは当時のテキスト（ロベスピエール、サン=ジユストなど）を読み解き、そこからいくつかの問題を発見することが試みられる。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本年度は合計して20回の研究会を開催して、ひきつづきビヨール=ヴァレンヌ「暫定的かつ革命的な統治のありかたについての報告」（1793年11月18日）、ロベスピエール「政治道徳の諸原理について」（1794年2月3日）、同「信仰の自由のために」（1793年12月6日）という、国民公会およびジャコバン・クラブでなされたディスカールの解読を行うとともに、「1793年9月5日：《恐怖》のはじまり」および「18世紀フランスにおける《恐怖》の概念」を主題とする個別の研究報告と討論を行い、さらに、下記・7に示す公開講演会および公開合評会を実施した。

6. 研究成果の概要 (400字程度)

上記のディスカールの解読は、そこで用いられる言語表現、各話者の政治的経歴、その背景にある思想的・政治的状況について、詳細に検討を加えるものであり、前年度と同様

かざられた数のディスカッションを扱うにとどまったが、しかし並行して行った研究報告および公開講演とあわせることで、切迫した政治状況のなかで《 徳と恐怖 》の観念が胚胎し拡大してゆく過程、革命政治における宗教の意義、またこの観念が18世紀思想全体のなかで占める位置について、理解を深め、班員のあいだで共有することが可能になった。さらに、公開合評会は主として19世紀フランスの政治意識を中心的なテーマとするものではあったが、トクヴィルが18世紀、とりわけアンシャン・レジームとフランス革命に向ける独自の視線や、モンテスキュー、ルソーなどの啓蒙哲学者との関係が明らかになるなかで、共同研究に大いに資するところがあった。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）
（公開シンポジウム）

- ・ 4月22日開催：シリーズ・スペクトル公開講演会：« Montesquieu et la crise du droit naturel moderne. L' exégèse straussienne »
- ・ 4月29日開催：公開合評会「富永茂樹『トクヴィル—現代へのまなざし』をめぐって」
書評講演・松本礼二・佐藤淳二

（2件ともに人文研本館セミナー室2にて開催）

（電子媒体）

- ・ 研究班ホームページ(研究目的やメンバー、開催記録を公表)

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/Lumi-Revo/>

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	4	11	200
国立大学	3	5	80
公立大学	1	1	18
私立大学	3	3	50
大学共同利用機関法人	0	0	0
民間・独立行政法人等	0	0	0
外国の研究機関	2	2	20
（うち大学院生）	（ 2 ）	（ 5 ）	（ 80 ）
計	13 (2)	22 (5)	368 (80)

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

（例）

- ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	9
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	0

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名
該当なし		